

αMプロジェクト2022

判断の尺度

Have something that defines my judgment

vol. 2 加藤巧 | To Do

vol. 2 Takumi Kato: To Do

ゲストキュレーター：千葉真智子（豊田市美術館学芸員）

Guest Curator: Machiko Chiba (Curator, Toyota Municipal Museum of Art)

2022年6月18日(土)～8月6日(土) オープニングパーティ等はありません。

12:30～19:00※ 日月祝休 入場無料

会場：gallery αM

〒101-0031 東京都千代田区東神田1-2-11アガタ竹澤ビルB1F

tel:03-5829-9109 fax:03-5829-9166

<https://gallery-alpha.com>



《To Paint (fire)》

2022年 | 顔料、卵黄、アクリル樹脂、二水石膏、兔膠、亜麻布、木材 |
50.2×33.8cm

※新型コロナウイルスの影響により、開催日時の変更や入場制限をする場合がございますので、お越しいただく際に Web サイト、SNS 等で最新情報をご確認ください。
またご来廊の際には必ずマスクを着用いただき、ご連絡先の記入等へのご協力をお願いいたします。体調の優れない方はご来廊をお控えくださいますようお願い申し上げます。

メディウムを介してダイヴしようとする事。
 絵を造りながら加藤さんがしていることを、こう言うことはできないだろうか。
 絵画が「絵画」として存在する以前に遡る時間、あるいは美術とされる枠を超える領野。あえてメディウムを引き受けながら、なおそこに向かおうとすること。

今回の企画を考えるなかで頭を占めていたことの一つは、いまある判断や批評の枠組みそれ自体からどう逃走することができるか、ということであった。私たちが使う言葉は、了解されているルールがあつてはじめて機能する。この決まりごとに慣れていくなかで、私たちは判断そのものを、無意識のうちに私の外部に委ねてしまっているのではないだろうか。

美術には、いくつかのジャンルと呼ばれるものがあり、そのジャンルに特有のメディウムがあり言語がある。だから、作品を作ろうとすれば、おのずと長年の蓄積によって形成された問題の系譜を頼りにしてしまうし、作品を見ようとすれば、おのずと聞き覚えのある批評言語を当てはめてしまうこともあるだろう。しかし、長年の使用に耐えてきたメディウム＝言葉には本来、私たちが限定的に使用する以上の、自立した可能性が潜んでいるのではないか。メディウム自体が、私たちが新たな地平に導いてくれるのではないか。メディウムを、放棄することなく扱い直そうとすること。
 あえて、もっとも古いメディア＝絵画でその実践を試みるのがよいだろう。

使い古されたはずのメディウム＝言葉を通して遠くに行く。思いきって、私の手癖を放り投げる。作家も。批評も。そうしたとき、私たちは何から解放され、何をすることができるのだろうか。

千葉真智子

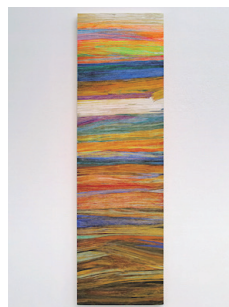
To do

何者かの運動軌跡がある表面に残っている、その様子を見る。
 それぞれの振る舞い（≒運動軌跡）には、運動の種別ごとに、用途ごとに、場面ごとに、「動詞」が割り当てられている。表面に現れている強弱、方向、材料の状況、使用された道具、などから、その振る舞いがどのようであったのかが観察される。もしくは、その振る舞いは「どのようにもあり得たのか」。
 日々は振る舞いの集積でできているが、その行為のそれぞれを振り返り、つぶさに見ることができるだろうか。行動はどうであるのか。日々残し、または残ってしまう運動の軌跡は「どのようにもあり得るのか」。

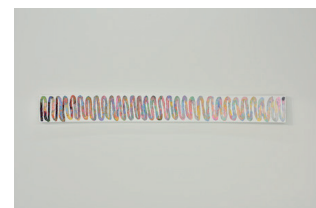
加藤巧



《Spinach》
 2021年 | 顔料、アクリル樹脂 (Paraloid B-72)、水性樹脂 (Jesmonite AC100)、木材 | 37.6×29.5cm
 撮影: 高嶋清俊 提供: Yoshimi Arts



《Soil Layer》
 2021年 | 顔料、カゼイン、アクリル樹脂 (Paraloid B-72)、水性樹脂 (Jesmonite AC100)、木材、アルミ材 | 120×35cm



《Stroke #02》
 2018年 | 顔料、卵黄、乾性油、グリセリン、アクリル樹脂、二水石膏、亜麻布、木材 | 20×183cm 撮影: 大島拓也

●加藤巧 (かとう・たくみ)

1984年愛知県生まれ。岐阜県在住。美術家。人間が扱う材料や行為を中心的な関心として、それらを検討、再構築することで絵画などの作品制作を行なっている。近年の主な個展として「Quarry」 gallery N (愛知、2021)、「Re-touch」 the three konohana (大阪、2021)、「ARRAY」 the three konohaha (大阪、2016) など。主なグループ展に「SUPERNATURE」 White Conduit Projects (ロンドン、2021)、「2つの時代の平面・絵画表現—泉茂と6名の現代作家展」 Yoshimi Arts・the three konohana (大阪、2021)、「VOCA 展 2020 現代美術の展望・新しい平面の作家たち」上野の森美術館 (東京、2020)、「タイムライン—時間に触れるためのいくつかの方法」 京都大学総合博物館 (2019)。

●千葉真智子 (ちば・まちこ)

豊田市美術館学芸員。愛知県生まれ。企画担当した主な展覧会に「寺内曜子 パンゲア」豊田市美術館 (愛知、2021)、「岡崎乾二郎視覚のカイソウ」豊田市美術館 (愛知、2019)、「切断してみる。—二人の耕平」豊田市美術館 (愛知、2017)、「遠隔同化 二人の耕平」「切断」のち「同化」 KYOTO ART HOSTEL kumagusuku (京都、2016-2017)、「ほんとのうへのツクリゴト」岡崎市旧本多忠次邸 (愛知、2015)、「ユーモアと飛躍 そこにふれる」岡崎市美術館 (愛知、2013) など。また、デザイン・装飾芸術に関する展覧会も企画。今年度、「交歓するモダン 機能と装飾のポリフォニー」

「判断の尺度」

千葉真智子 (豊田市美術館学芸員)

全ては平等に。その呼びかけは、平等であるために過度なまでの正しさを私たちに求める。しかし正しさとはそもそも何だろう。それはときに一つの原理へと向かい、小さな個別の差異を見えなくしてしまうだろう。いうまでもなく、平等であることは同じであることを意味しない。同じでないものを等しいというとき、私たちは尺度を一つにして、個々についてのそれぞれの評価や判断を手放さなければならないのだろうか。そうではなく正しさを超えて区別し、言葉を与えようとする。それには、私たちが手垢のついた言葉自体を作り直す必要がある。美術と呼ばれるものが少なくとも造形に関わる行為であるならば、その造形＝言葉を練り、抛り所にする。尺度自体について問い、判断自体を創造的に作ることができるのではないだろうか。独りよがりになることなく、普遍的な外部をもつものとして。

私の判断が普遍性をもつかどうかは他者の判断に賭されている。私の判断を支えるものとして、私の外部を召喚すること。そこで想定されるのは、予め同じ尺度を持たないもの、置き換えできないものであり、その困難な対話が新たな言葉と批評を開く可能性の種となる。

1年の企画をとおして、それぞれの作家とともに判断の尺度について考えてみたい。これまでの尺度を手放して作り直す。この造形＝言葉による判断は、世界を測る尺度となる。だからこの行為は、静かに深く政治的でもある。

■取材、掲載用写真の貸出など、ご質問がございましたら下記までお問い合わせ下さい。■

gallery αM ギャラリーアルファエム

e-mail: alpham@musabi.ac.jp / tel:03-5829-9109 / fax:03-5829-9166

武蔵野美術大学 大学企画グループ 社会連携チーム(ギャラリー不在時)

tel:042-342-7945 / fax:042-342-6087